

ネタバレが映画視聴に与える影響に関する研究

富永 一紀

近年、特に若者を中心に、映画の内容をあらかじめ把握した上で視聴する「ネタバレ視聴」が行われている。この現象に関連し、小説やコミック、ゲーム、ドラマといったさまざまなメディアにおけるネタバレの影響を検討する研究がこれまで行われているが、長編映画を対象とした研究は見受けられなかった。また、既存の研究においては、ネタバレが視聴体験に否定的な影響を与えるとする結果と、肯定的な影響を与えるとする結果が混在しており、一貫した結論には至っていない。そこで、本研究では長編映画を対象に、ネタバレの有無を条件とした映画視聴と半構造化インタビューを通じて、ネタバレが映画視聴に与える影響を明らかにすることを目的とした。

本研究では、大学生および大学院生の計 8 名を調査対象者とし、次の 3 つのグループに分類した。(i) ネタバレなし、(ii) ネタバレあり、(iii) ネタバレあり (条件付き)。すべてのグループに映画の導入部分を 300 字程度で表現したあらすじを提示した上で、グループ (ii) および (iii) にはネタバレとして犯人の正体を提示した。尚、グループ (iii) は、犯人の正体以外の情報をすでに知っている者、対象映画の原作小説を読んだことがある者、対象映画を視聴したことがある者で構成した。対象映画には、ミステリー長編映画である『マスカレード・ホテル』(2019) と『オリエン特急殺人事件』(2017) を選定し、調査対象者にはいずれか 1 作品を視聴してもらった。視聴後には、作品に対する評価や視聴習慣、ネタバレに関する習慣について半構造化インタビューを実施した。

調査の結果、映画の面白さや没入感、視聴・再視聴の意欲、緊張感の要素において、ネタバレが否定的な影響を与えることが確認された。しかし、これらの影響の大きさは、視聴者が映画視聴時に注目する要素や作品の構成、視聴環境といった外的要因によって変化する可能性が示唆された。一方で、作品を深く理解する助けとなることや、ネタバレによって生まれた独自の視聴体験を楽しむなど、ネタバレによる肯定的な影響も確認された。また、映画視聴前の段階では、視聴する映画の選定を効率化し、視聴への安心感をもたらす手段としてネタバレが機能する可能性も示された。このことは、リメイク作品や原作の映像化が 2000 年代以降増加していることについての議論や、Z 世代の消費行動における価値観の研究を踏まえると、映画視聴に対する価値観が、「わからないことを楽しむ」から「わかっていることを再確認するように楽しむ」へと変化しつつあることが関連していると考えられる。

本研究を通じて、ネタバレと外的要因との関連性や、ネタバレがもたらす肯定的な影響といった新たな知見が得られた。今後は、得られた知見を基に質問紙を作成し、より大規模な調査を実施することや、対象とする映画のジャンルをミステリー以外にも広げることで、映画視聴におけるネタバレの影響を正確かつ包括的に検討できると考えられる。

(指導教員 後藤 嘉宏)